朝日塾小学校 校長対談

朝日塾小学校 校長　軌保 學峰×第64代理事長　鈴森 賢史

鈴森理事長：本日はどうぞよろしくお願いいたします。初めに学校の方針などを教えて下さい。
軌保校長：私たちは幼児から少年へ成長する一番大切な時期をお預かりしています。他の小学校と比べると少し特殊で、入って来る子供たちのほぼ全員が有名中学校へ進学を希望していますので、受験勉強に特化した学校として20余年間成果を挙げてきました。けれど、開校してから幾度か時代の転換期があり、教育に関する考えも変わってきました。特に阪神大震災や東日本大震災など、一人ひとりの力ではどうしようもできないことが起こるたび、周りからの支える力を感じ、その力に感謝する世界が広がったと思います。したがって学校教育方針を整備しまして、「やさしさ（利他）」「かしこさ（英智）」「たくましさ（剛健）」を兼備した子供を育てるというところに位置づけました。自分が精一杯努力することでいろいろな人たちの支えになれる、そのことに喜びを感じる子に育てたいと考えています。また、そういった心の子ほど勉強も良くできます。朝日塾小学校の子は高い学力を持っていると言われてきましたが、その学力に見合った人としての品格と、その学力を何に使うかを考える子に育てたいと思っています。
鈴森理事長：学力重視で行ってきた学校教育に「やさしさ」という品格教育を取り入れられたとのことですが、具体的にどういったことを行っているのでしょうか。
軌保校長：通学バスは1～6年までの異学年が乗り合わせますが「上級生は下級生の面倒を見てね」とか、それぞれの子供たちに「やさしさ」を具現化するテーマを与えています。「やさしさ」とは周りの状態に気づくことであり、集団の中で今何が必要なのかを分かるようになることです。それはリーダーの資質の1つであり、それを育てるには全体を把握して、その集団に何が必要なのかを見極めて、先を見通して動けるようにならなくてはなりません。自分のためではなく集団のために動くことに喜びを感じる人でなければリーダーになりきれません。
鈴森理事長：品格教育を受けて、子供たちが成長する姿をみて保護者の反応はいかがですか。
軌保校長：当初は品格教育ばかりに力を入れると学力が落ちるのではないかと心配される保護者の方もおられましたが、品格が身についた人間の学力が落ちることはあり得ません。品格教育を進めるほど、自己形成の主体となり自己分析を行う力がつきますので尚更がんばることができるようになります。学力を育てることと、品格を育てることは矛盾しませんとお答えしてきましたし、実際にそうなっています。また、以前は外部の方が一部分の子を見て「朝日塾の子は学力は高いけれどしつけがなってない。」とお叱りを受けることもあったのですが、今ではそういった声が少なくなり、学校全体が整然としてきました。
鈴森理事長：時代背景と共にそういった考え方が必要になってくると思います。一般的にも受け入れやすいです。
軌保校長：幼い時は自分の興味のあることや楽しいことが目の前にあると「我慢しましょう」と伝えても気持ちのままに動いてしまいがちです。そのまま成長してしまうと「気持ちが良いか悪いか」とか「損か得か」を行動の規範とする大人になってしまいます。今の若い犯罪者は「イライラしたから」といった理由で人を傷つけたりしますが、そういった身勝手な大人に育たないように教育していかなければなりません。善か悪か、正しいか正しくないかという基準が行動の規範となる人間を育てることが大切だと考えています。
鈴森理事長：「徳育」という言葉で語られていますね。
軌保校長：文科省はしきりに道徳と言いますが、道徳は大人の倫理観の押し付けになってしまいがちなので、子供たちに良いことと悪いことを自分たちで判断して、損になっても正しいことを行える子供に育って欲しいと考えています。小学生ですから色々なトラブルもありますけれど、子供には「間違いを犯す権利」と「間違いを謝る権利」と「間違いを許される権利」があります。悪いことをしたと気づいたら素直に「ごめんなさい」と謝ることができる子供に育ってほしいと思います。
鈴森理事長：日々の生活の中で訓練され、育っていくわけですね。けれど、それでは子供たちを育てて導く先生たちはたいへんではないでしょうか?
軌保校長：それはたいへんです。保護者の理解が一番必要なのですが、皆様自分の子供がかわいいので待ったなしで相手を許さないことがあります。しかし、その気持ちを乗り越えていただかなくてはいけません。そのため、教師と保護者で会合を行って色々な啓蒙活動を行っています。また、何よりも指導者としての大人の品格が問われます。先生方にも人としての在り様についてお願いすることが多くなっています。
鈴森理事長：先生と保護者の話し合いは頻繁に行っておられるのでしょうか。
軌保校長：毎月参観日を行っておりますし、その都度、懇談会や個人懇談も行っています。通学バスは18コースあるのですが、全てのコースで懇談会を開いて「保護者の皆様と私たちで地域に替わる組織として子供を育てましょう」と伝えていますと、子供たちの生活態度も変わってきて、保護者の方にも理解されるようになりました。
鈴森理事長：生活態度の改善と共に子供たちの人格形成に大きく影響を与えているのですね。
軌保校長：私は団塊の世代ですので一番競争原理の激しい時代に育ってきましたが、あの競争は何だったのかと思い返すことがあります。振り返った時に「ああ、小学校時代に一所懸命がんばって良かった」と思える教育を子供たちに与えてあげたい。原点に返れる場所が朝日塾であってほしいと思いますし、それが朝日塾人を育てることだと思います。
鈴森理事長：そういった教育を受けた子供たちが活躍してくれることほど嬉しいことはないでしょうね。
軌保校長：活躍するチャンスのたくさんある子たちですからね。保護者の皆様も立派な方ばかりですし、子供たちも期待に応えてほんとうにがんばっていますので、育てがいがあります。残念ながら私はその活躍を見られるほど長生きできそうにありませんが（笑）、思いを子供たちに託しています。

鈴森理事長：岡山県は様々な教育に関する課題を抱えています。朝日塾小学校では無いことでしょうが、学力の低下、不登校、少年犯罪など県全体で取組むべき事柄だと思います。私たちも子育て世代なので、子供を育む力を磨きたいと考えています。そして、子供たちにより良く生きる力や人生を豊かにする考え方を身につけてもらいたいと思い、教育に関する事業に取り組んでいます。岡山の教育の現状についてどのようにお考えでしょうか。
軌保校長：岡山の順位がワースト何位だとか、すぐ騒いだりすることが気になります。日本中で言えることですが、教育を通して行ってきたひとづくりの方法が現状を作っていると思います。国内外の学力調査結果を話題にして、急に何とかしなくてはと、学力向上に一定の成果を挙げた学校に補助金を出したり、順位を公表したりすることだけが騒がれることで、岡山でも学力調査の学校順位を上げるために過去問題の特訓などを行いだした学校もあるようですが、果たしてそれで良いのか今一度考える必要があります。学校ですから高い学力をつけることは当然なのですが、子供たちの特性を伸ばす教育の在り様が問われるよりも、点数を上げるための競争の世界に追い込むのではないかと心配しています。良い点を取って褒められると人間性まで優れていると勘違いしてしまう子が出てきます。成績のかんばしくない子を人間的に劣っていると勘違いして排除しようとする動きになると、いじめになったり、不登校や学習意欲の喪失の原因になってしまいます。現在様々な学校で不登校や問題行動の改善のために一生懸命取り組んでいることも、学力を上げるということだけに縛られると逆効果になってしまいかねません。

鈴森理事長：岡山青年会議所はまちづくりのために色々な事業を行っていますが、私たちの活動に期待することや要望がありますでしょうか。
軌保校長：例えば岡山青年会議所が行っている「うらじゃ」は年代や地域を越えた集団を形成していて、子供たちも参加できますので、頑張っている自分に誇りをもったり、やればできるという気持ちをもてたり、仲間と一緒にがんばることの楽しさなどを体験できる、子供たちの情操教育にとても良い取り組みです。がんばることは良いことなのに、競争原理の世界だと、全員が同じように頑張ったとしても残念ながら半分の人に悪い評価がつきます。ところが、「うらじゃ」のような体験だと全員が努力の分だけ「良くがんばった」と評価され胸を張れます。こういった事業を増やしていくことが本当の教育環境作りだと思います。
青年会議所がそういった活動をされていることにたいへん魅力を感じています。学習は「新しい自分を発見する」ことの積み重ねですが「新しい自分を知る」ということは自分の世界を広げることだと私は考えています。是非、子供たちの世界を広げるような事業を展開して欲しいと期待しています。
鈴森理事長：本日はありがとうございました。

COLLABORATION
DANRYU 2014 VOL.3